

# 地震史料中の慣用表現について—文禄伏見地震史料を中心に—

濱野未来(立命館大学文学研究科)

## §1. はじめに

歴史災害研究において、史料批判は基礎的かつ最も重要な作業である。故に幾つかの地震史料については、既に詳細な史料批判が行われている(例えば石橋(2019)等)。一方で、史料批判の際には、特定の史料の信憑性や由来だけでなく、複数の史料の相互関係を探ることもまた重要であろう。殊に、同じ地震について記録された複数の史料が存在する場合、記述された情報の出処が同一であることも多く、各史料の関連性の検討は重要である。また、共通する情報のソースが明らかとなることで、史料群単位での史料批判に繋がるとともに、災害情報の出所や伝播経路を通史的に捉える一助となる。

史料同士の関係を探るうえで手懸りとなるのが、記述表現の一致である。本報告では、共通する記述表現のある史料を対象に、その情報の出処の分析を行う。それにより、各史料の関連性を検討することを目的とする。

## §2. 「文禄五年伏見地震」史料

本報告で対象とするのは、文禄五年(慶長元年,1596年)に発生した地震に関する史料である。当該史料については、萩原(1989)をはじめ、同時代史料を中心に検討がなされている。そこで本報告では、後代に記録・編纂された所謂二次史料を検討することで、後代に至るまでの情報の伝播経路を考えてみたい。

## §3. 共通記述をもつ史料

伏見地震の関連史料のうち、記述表現が一致あるいは極めて類似しているものが複数散見される(ここでの記述表現は、史料の内容ではなく、記された文言や叙述を指す)。本報告で着目するのは、「土裂水出、京都伏見の大廈巨宅及民屋破れて死人数を知らず、洛陽大仏殿崩れ仏像破す、伏見城殿舎倒崩る」(『家忠日記増補追加』)なる記述、及びこれに類似する記述である。その内容は、京都や伏見における被害状況を示すものである。本表現と一致/類似する記述が見られる史料が、表1に示す10点である。

本報告では、本表現を次の5つの要素に分解して分析する。すなわち、⑦液状化現象(「土(地)裂水出(涌)」)、⑧邸宅・家屋の被害(「大廈巨宅及民屋破」)、⑨死者数(「死人数を知らず」)、⑩大仏殿の被害(「洛陽大仏殿崩れ仏像破す」)、⑪伏見城の被害(「伏見城殿舎倒崩」)、である。表1では、各要素の記述表現が一致するもの/しないものを「水出、大廈、死人、大仏、伏見城」欄に示した。

表1 記述に共通性をもつ史料一覧

史料名/表現	水出	大廈	死人	大仏	伏見城
家忠日記増補追加	1	2	3	4	5
細川家記	1	2	3	4	5
藤林年表	1	2	3	4	5
東大寺雑集録十二巻并附録	1	2	3	4	5
慶長日記増補	1	2	3	×	4
続本朝通鑑	1	2	×	3	4
続史愚抄	1	2	×	3	4
伊達治家記録	1	2	×	×	×
太祖公濟美録七(武徳編年集成)	3	1	×	×	2
地震雑纂(東遷基業)	1	×	×	×	2

凡例: 史料中の記述表現が一致/類似する場合は、記述順を数字で示した。記述表現が類似しない場合は×で表した。

## §4. 史料の相互関係

西山(1996)は伏見城の死者情報を基に、幾つかの史料に系統があることを指摘している。そのうち、表にある『東大寺雑集録』は同時代史料あるいは『当代記』を典拠としたとしている。さらに、『家忠日記増補追加』『東遷基業』『武徳編年集成』『細川家記』は、『当代記』を典拠としたと論じている。加えて、表から判るように『当代記』を典拠としたとされる史料は、その表現が一致するだけでなく、記述順までも一致していることから、同じ史料を典拠として記されたと考えられる。一方で、『当代記』の記述は5つの要素のうち⑦の情報は記しているが、表現は一致していない点、⑧～⑩は記述されていない点には注意すべきであろう。すなわち、上記史料は『当代記』を典拠とした可能性は残るものの、典拠の中心となるのは別の史料であった可能性が高いといえる。あるいはこれらのうち成立の早い『家忠日記増補追加』『東大寺雑集録』が他の史料の情報源となったと考えられる。

## 参考文献

- 石橋克彦,2019,1605年慶長津波を記す「阿闍梨暁印置文」の史料批判,歴史地震,34,31-40.  
 西山昭仁,1996,文禄五年の伏見地震の被害実態,歴史地震,12,117-129.  
 萩原尊禮(編),1989,続古地震—虚像と実像,東京大学出版会.